おいしい

やまだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おいしい

【Ｎコード】
Ｎ２２３６Ｉ

【作者名】
やまだ

【あらすじ】
病んだ男とそれに気づかなかった女

閲覧注意

麗子が不思議な顔をしてご飯を食べている。なんでこんなものを口の中に入れなきゃいけないの？といった目をして僕の作ったシチューを食べている。

僕はその光景を微笑みを作りながら見つめている。

麗子、ごはんおいしいかい？と話しかけてもみる。麗子からの返事はない。

僕と麗子は同じテーブルに向き合って座っている。テーブルにはシチューが一皿あるだけでそれは麗子の分だ。僕のはない。

あなた食べてよ。と麗子がいった。君のために作ったんだ。と僕がいう。ちなみに僕はおなかがペコペコだ。麗子のために仕事から帰ってすぐにシチューを作ったから、3時間かけて、1皿分だけ。

あなたガリガリじゃない。と麗子がまた口をきいた。確かにそうだ。夕食時には僕がごはんを一食分つくって麗子に食べさせる、そんな食生活が結婚してからずっと続いている。やせるのは当然だ。君もガリガリだよ、と僕がいった。いつの麗子は僕が作った夕食をろくに食べない。一口か二口食べるだけですぐにスプーンを投げ出してしまう。僕の料理がまずいということは決してない。実際、彼女と交際していた頃や、結婚したての頃はおいしいおいしいと言って僕が作った料理を食べていたのだ。

僕たちは3年前に知り合った。大学の食堂で学食を食べている麗子の美しさに僕は惚れた。なにしろ全ての動作が完璧だったのだ。スプーンで緑色のスープを掬う仕草、ほうれん草のおひたしを咀嚼している頬の膨らみかた。そして、おいしそうに豚キムチを食べている彼女のキラキラした瞳が僕をとりこにした。友人を通して知り

合い。僕らは付き合うことになった。僕はデートの時は毎回彼女をレストランに誘った。私、食べるの大好きなの。十一回目のデートのとき、シーフード料理が有名なレストランでシャコの殻を剥きながら麗子はやっぱりキラキラした目で言った。僕は結婚を申しこんだ。彼女はシャコを剥く手をとめて、嬉しいと言って笑った。

シチューは冷え始めている。
早く食べないと冷めちゃうよ。
麗子は何も言わない。
君がごはんをおいしそうに食べている姿をずっと見つめていたいんだ。
麗子の顔が歪んだ。
僕がごはんを食べていたら君が食べる姿があまり見られなくなるだろう？
両頬を風船のように膨らませた後、麗子は吐いた。
彼女の胃袋にあったシチューとウェッジウッドの深皿に盛られているシチューが混ざった。
テーブルに吐き出されたシチューがこぼれて床に滴った。酸っぱい匂いがシチューのクリーミーな香りと溶け合う。
やはり麗子は吐く姿も美しかった。
うつむいた麗子の顔に涙がつたい、瞳はキラキラと光っていた。
僕はこれを待っていたのだ。
最高だと僕がいった。
別れましょうと麗子がいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2236i/

おいしい

2010年10月10日04時41分発行